

はじめに

総面積五四九〇万平方キロ、約四七億人の人びとが生活をする世界最大の大陸、ユーラシア大陸の東端に、南北に弧状をなして大小の島々が連なっている。ちょうどユーラシア大陸という名の海岸に打ちよせた荒波が白い水飛沫をあげているように、北から千島列島、日本列島、南西諸島という、それぞれ小さな弧状をえがきながら、延長は約四〇〇〇キロにもおよんでいる。なお、日本列島といえは、北海道、本州、四国、九州の四つの島とその付属島からなる狭い範囲を指す場合と、琉球諸島など南西諸島を含めた広い範囲とする場合があるが、本書では、とくにことわらない限りは、北海道から琉球（沖縄県）にいたる範囲を日本列島と呼ぶことにする。

日本列島は、北は北緯四五度五分、南は北緯二四度にわたるといふように、島々が南北に細長く連なっている。最大の本州島でも、面積は二三万平方キロにたらず、幅は最大で三〇〇キロと狭いにもかかわらず、日本列島の山地は一般的に高い。北海道をはじめ、本州、四国、九州だけでなく、南西諸島の屋久島まで二〇〇から三〇〇メートル級の山々が広がっている。山地の面積は約七〇パーセントにも達し、河川はいずれも急流をなして複雑な谷をきざみ、そのために小さな沖積平野が各地に広がっている。この島国でありながら、山国であるということが、日本列島の自然環境を複雑な

ものとしている。

日本列島は、別に花綵列島とも呼ばれている。それは弧状をなす大小の島々が、細ひもで花を結んでつくった花飾り、つまり「花綵」に似ているところから名づけられたものである。日本列島そのものが、不完全ながらも今日の弧状列島の姿を現わしはじめたのは、哺乳類の時代といわれる新生代のうち、新第三紀鮮新世のはじめのころである。新生代は、古第三紀、新第三紀、第四紀に区分されるが、第四紀は別に氷河時代と呼ばれるように、この地球が非常に寒冷で氷河が発達する氷期と、温暖で氷河が後退する間氷期が交互に繰り返されるといって、厳しい気候変化に見舞われた時代であった。また、世界の火山の多くは第四紀火山と呼ばれているように、第四紀になってから噴火活動が活発化したことから、地殻変動や火山灰などの堆積も激しかった。そして、新第三紀鮮新世のはじめにあたる五〇〇万年前から、それを若干さかのぼる時期に誕生した人類は、こうした第四紀の激しい環境変化という試練をうけることになる。だが、この厳しい試練に耐え、それとたたかってきたからこそ、人類は進化し、爆発的に適応・拡散できたのである。第四紀が人類の時代、あるいは人類紀とも呼ばれるゆえんである。



一方、第四紀のはじめのころの日本列島は、日本海の一部を湖として、大陸と陸つづきであった。そして、氷期がすすむにつれ、現在の海峡のある地帯が浸食によって、しだいに低い地形となっていた。そのために、氷期には陸橋となっていた地帯が、間氷期には海峡となって、湖であった日本海に海水が流入するようになっていたのである。ということとは、日本列島を大陸から区切る海峡は、氷期を越ればさかのぼるほど、生物の移動にとつては、なんらの障害にはならなかったのである。

たとえば日本列島に渡ってきた動物群には、ナウマンゾウ、オオツノシカ（ヤベオオツノジカ）、カモシカ、ニホンカモシカ、ツキノワグマ、イノシシ、ニホンザルなどの黄土動物群と呼ばれる冷温帯動物群、マンモスゾウ、ヘラジカ、バイソン（野牛）、オーロックス（原牛）、ヒグマ、キタキツネ、ナキウサギなどのマンモス動物群と呼ばれる亜寒帯動物群がよく知られている。このうち黄土動物群は、約六〇万から四〇万年前の氷期やその後の約二三万から一三万年前の氷期に形成された南の陸橋を渡ってきており、一方のマンモス動物群は、約七万から一万一五〇〇年前の最終氷期に形成された北の陸橋を渡ってきたのである。

日本列島で誰もが人類遺跡として認める最古のものは、約四万年前に遡る。ということとは、最終氷期のまっただに、日本列島で人類の生活が開始されたのであって、これは地質年代で第四紀更新世、人類の時代区分で旧石器時代、それも後期旧石器時代に相当するということになる。

最終氷期の最寒冷期（約二万五〇〇年前）を境として、気温は多少の寒・暖を繰り返しながら上昇し、約一万四五〇〇年前には、一時的に現在とほぼ同じ気温にまで到達したが、その後、一転して短期的に、かつ激しい寒・暖がおこり、氷期への逆戻りともいえる寒冷気候が再来した。この寒冷気候の再来を最後に氷期は終了し、今日にみる日本列島の環境がほぼ成立する、地質年代で第四紀完新世をむかえることになるが、その年代は約一万一五〇〇年前のことである。

この完新世のグローバルな気候の温暖化のもとで、新しく形成された環境に適応した人類が、高度

に集約化した獲得経済、ないし農耕・牧畜による生産経済を開始することによって、各地で非常に特色をもった地域文化を発展させたが、これが人類の時代区分でいう新石器時代である。この新石器時代に日本列島に開花した地域文化こそが、縄文時代の文化である。そして、約二七〇〇年前に水稻農耕と金属器の使用を本格的に開始する弥生時代をもって、日本列島では、石器時代が終焉することになる。

本書であつかう日本列島の石器時代とは、約四万年から二七〇〇年前までということになる。それを率に直すと、列島の人類史は、九三パーセント強をも石器時代が占めていたことになり、それだけ悠大な時代を歴史叙述するということである。



ところで、石器時代と一口にいつても二つに分かれ、旧石器時代と縄文時代とは、取りあつかう資料に大きな差があるということに注意する必要がある。というのは、定住生活をはじめていた縄文時代では、身のまわりにさまざまな道具類を備えていただけでなく、定住生活にともなうさまざまな施設である竪穴住居、貯蔵施設、作業施設、埋葬施設、祭祀施設、広場などを残している。また、日本列島は、土壌が酸性であるために、有機質の多くが腐朽・消失してしまいが、縄文時代には、貝塚遺跡や低湿地遺跡があつて、それらからは人工遺物にともなつて、多くの自然遺物が残されている。それだけ縄文時代では、取りあつかう資料が豊富で、歴史を多角的に叙述することを可能としている。

ところが、移動生活を基本としていた旧石器時代は、もち運びできる最小限の道具類しかもたない方が合理的であることから、縄文時代とは違って、身にもてるだけの限られた道具類しか備えていないだけでなく、居住にかかわる施設もわずかな痕跡しか残さない。また、日本列島の旧石器時代遺跡は、ほとんどが開地遺跡で、しかも、土壌が酸性であることから、ヨーロッパやシベリア、中国などのように、遺跡から哺乳動物などの自然遺物をともなうことは、残念ながら、非常に限られてしまう。そのため、日本列島の旧石器時代では、取りあつかう資料が人工遺物、それも石器に限られてしまうということである。

本書は当初、旧石器時代と縄文時代という時代枠をこえて、「石器時代」の視点で日本列島の人類史を叙述することをめざした。しかし、前述したように、旧石器時代と縄文時代とは取りあつかう資料に大きな違いがあり、それによって叙述の仕方が大きく異なってくることから、通史的な叙述の前に、そうした研究の違いを読者に理解していただく必要性を痛感した。

そこで、本書では、旧石器時代編と縄文時代編の二部構成にして、それぞれの研究の現状での到達点と最新の研究成果を紹介しながら、日本列島の「石器時代」の通史的な叙述にせまる新しい挑戦の第一歩にしたいと考えた。書名を『日本列島 石器時代史への挑戦』としたゆえんである。



考古学は、人類が過去に残した物的資料（遺跡・遺構・遺物）を研究対象とする。そうした物的資料は、時代が遅ればさかのぼるほど乏しくなるというのが、考古学という学問の、いわば宿命であ

る。しかし、考古学は物的資料から離れては学問として成立しないので、そうした限られた物的資料ではあっても、そこから歴史を組み立て、いかに歴史叙述をしていくかということこそが、私たち考古学者に課せられた責務である。そうした私たちの知的試みを、本書をとおして読者に追体験していただくとともに、読者の日本列島の石器時代像の理解に、多少とも役立つことができるとすれば、望外の喜びである。

二〇一一年一月

勅使河原 彰

第1部 旧石器時代編

安蒜 政雄

第1章 日本人類文化のあけぼの 15

1 旧石器時代の世界 15

旧石器時代研究のはじまり / 日本の旧石器時代研究 / 旧石器時代の自然と遺跡の景観 / 関東の住人はどこから来たのか

2 旧石器時代の遺跡の成り立ち 26

石器の使い手と作り手 / 移動生活の実態の解明 / 遺跡の成り立ち

3 日本列島の旧石器時代研究 34

三つの研究分野 / 三文化五時期編年 / 黒耀石考古学の役割

第2章 黒耀石原産地の開拓とオブシディアン・ロード 50

1 黒耀石原産地の開拓 50

三大石器石材 / 鷹山遺跡群 / 石器作りの努力 / 石材原産地と大規模な石器

作り / 石材原産地から離れた大規模な石器作り / 大規模石器製作地の性格

2 日本列島を往来したヒトとモノ 65

現生人類の拡散と列島への移住 / 二度目の移住 / 環日本海旧石器文化回廊

3 オブシディアン・ロードと東アジア黒耀石文化圏 74

黒耀石文化 / 黒耀石のミチ——オブシディアン・ロード / 東アジア黒耀石文化圏

第3章 日本旧石器時代の系譜と構造 81

1 日本旧石器時代の系譜 81

石器作りの変容 / 旧移住民と新移住民の同化 / 大規模な石器作りの展開

2 日本旧石器時代のイエとムラ 93

イエの造り / イエの自立 / ムラの構え

3 日本旧石器時代文化の構造 103

起源を探る三つの糸口 / 日本人類文化の起源 / 地域の組み立て

4 旧石器時代から縄文時代へ 116

道具立ての変化 / 分化する生業

第4章 縄文文化の誕生

127

1 縄文文化成立の諸段階

127

縄文人の生活の舞台 / 弓矢の出現と新たな狩猟スタイルの確立 / 土器の出現
と植物利用 / 貝塚の出現と水産資源の活用

2 縄文文化の成立とその歴史的な位置

141

二つの画期と時代区分 / 考古学の時代区分 / 縄文文化の位置づけ

第5章 縄文文化の生業と特質

150

1 竪穴住居の出現と定住集落の形成

150

竪穴住居の出現 / 定住集落の形成 / 海辺の集落と山辺の集落

2 新しい環境の創造

162

一変する生活環境 / 彩のある生活 / 二次林的な環境の創造

3 生業と分業の特質

168

男女間の労働の分担 / 大地の利用 / 植物栽培はあったか / 余剰のあり方

第6章 縄文人の社会

193

1 住居と集落

193

／ 交易はなかった / 大規模な生産遺跡 / 縄文時代の分業と交換経済
住居での生活 / 住居の家族構成 / 集落の種類 / 縄文集落の仕組み

2 集落と村落

210

集落と生活領域 / 集落と共同体 / 血縁社会

3 縄文時代の社会構成

220

システム化された社会 / 環状集落と環状列石 / 巨大な木柱遺構 / 大型遺構
に投じられたエネルギー / 縄文時代の社会構成

第7章 縄文文化の展開と終焉

237

1 東西日本の地域差

237

気候最適期と縄文海進 / 縄文文化の画期 / 前期に顕著となった東西の地域差

2 縄文文化の発展をささえたもの

243

遺跡密度の解釈 / 地域差を生んだ要因 / 縄文集落と環境管理

3 安定と不安定 250

豊かな社会 / 遺跡の消長 / 貝塚文化と井戸尻文化 / 不安定を内包する安定
/ 縄文社会の矛盾

4 縄文から弥生へ 268

畑作に不適な土地 / 農耕の条件 / 朝鮮半島との交流と雑穀農耕 / 東アジア
の動向と水稻農耕の開始 / 農耕社会の形成

おわりに 283

参考・引用文献 / 図版の出版 巻末

第I部 旧石器時代編

安蒜 政雄

第1章 日本人類文化のあけぼの

1 旧石器時代の世界

旧石器時代研究のはじまり

人類史の始原である旧石器時代の研究は、いつどこではじまったのか。今から二〇〇年ほど昔のヨーロッパでは、すでに絶滅し地上から姿を消した動物の化石と、石を打ち欠いて作った道具とが、地下深く一緒に埋もれている事実が知られていた。最初は偶然の発見にとどまっていたが、しだいに積極的な拾集にとめたり、発掘を試みる研究者もでてくる。やがて、絶滅動物の種類と石器のかたちには、なんとおりもの組み合わせがあったことがつきとめられ、それらを古い順に並べた旧石器時代の編年が、一八六一年にフランスのラルテ (Fouard Lartet) によって示される。

しかし、まだこのとき、旧石器時代という言葉はなかった。ただし、石器時代という名称は用いら